

場所の表現に関する日英対照研究

杉浦 滋子

1. はじめに

文が表現する意味の中で「場所」は「日時」と同様、通常主要な位置にはない。自他動詞の主語、他動詞の目的語は主に有情物あるいは無情物であり、「場所」は存在文を除き、修飾的な位置に現れる。しかし、同じ動詞をもちながら、有情物あるいは無情物を主語あるいは目的語とする文と場所を主語あるいは目的語とする文が見られる場合がある。日本語では同じ自動詞「あふれる」をもつ文に有情物を主語とする(1a)と場所を主語とする(1b)、同じ他動詞「塗る」をもつ文に無情物を目的語とする(2a)と場所を目的語とする(2b)が見られる。

- (1) a. 駅に帰省客があふれている。
- b. 駅が帰省客であふれている。
- (2) a. 彼女は壁にペンキを塗った。
- b. 彼女は壁をペンキで塗った。

この現象は場所格交替と呼ばれ、日本語でも英語でも研究の対象となってきたが、本稿では場所格交替には含まれない存在物主語と場所目的語をもつ文をも加えて場所に関わる表現に関して日英対照を行う。第2節では場所格交替に関する三つの観察を提示し、第3節で英語では意味的に自動詞の主語となるはずがない「場所」が主語となる構文があると提案する。第4節では存在物を主語、場所を目的語とする他動詞を両言語で考察し、英語で場所が主語となるには制約があると主張する。

2. 場所格交替に関わる三つの観察

2.1. 全体効果

場所格交替においては全体効果が指摘されている。英語の自動詞、他動詞で例示しよう。場所が主語である(3b)には存在物が主語である(3a)にない「蜂が庭全体に分布する」という意味があり、場所が目的語である(4b)には存在物が目的語である(4a)に

ない「藁がトラックの容量いっぱいにある」という意味がある。

- (3) a. Bees swarmed in the garden.
 「蜂が庭で群れていた。」
- b. The garden swarmed with bees.
 「庭中に蜂が群れていた／庭が蜂だらけだった。」
- (4) a. She loaded hay onto the truck.
 「彼女はトラックに藁を積み込んだ。」
- b. She loaded the truck with hay.
 「彼女はトラックの荷を藁でいっぱいにした。」

場所格交替は英語、日本語、どちらの言語でも自動詞と他動詞に共通する現象のように見えるが、さらに見ていくと違いが見られる。

まず、英語の自動詞では一般的に全体効果が見られるが、日本語では自動詞で場所格交替を見せる動詞は場所全体に存在物が分布することを表す「あふれる」「満ちる」、場所が利用できなくなることを表す「詰まる」「つかえる」「散らかる」「渋滞する」であり、動詞の意味の中に共通して「場所全体が影響を受ける」という要素が存在する¹²。存在物が主語であっても場所が主語であっても場所全体が影響を受けているので全体効果はない。杉浦(2019, 2020)ではここから、次の制約があることを主張した。

- (5) 日本語では場所が主語となりうるのは動詞の語彙の意味に場所全体に影響があることが含まれる場合に限られる。

複合動詞の第二要素「-かえる」はいくつか意味をもつが、「あきれかえる」「しょげかえる」などでは「極限まで」という意味をもっていると考えられる(杉村2009)。(6)で見ると「詰まる」は場所主語をとらず、「静まりかえる」はとる。「極限まで」という意味が場所に適用されて「全体に影響がある」と解釈されたと考えると、(6)は(5)を支持する根拠となる。

(5) のような制約があるならば、日本語の自動詞の場所格交替には他動詞の場所格交替と異なる側面があることになる。

- (6) a. *教会は静まっていた。
b. 教会は静まりかえっていた。

他動詞に目を転じると、英語でも日本語でもすべての他動詞で全体効果が同じようにあるわけではない。英語 load では全体効果が見られるが、同じように場所格交替をする他動詞 spray の場合には場所が目的語となった (7b) でも壁全体でなく壁の一部のみにペンキがスプレーされたという解釈が可能である。

- (7) a. She sprayed paint on the wall.
b. She sprayed the wall with paint.

日本語の (8a) (8b) には意味の違いがあるが、それは (8b) に全体効果があるという違いではない。(ここではこの意味の違いが何であるかについては触れない。)

- (8) a. 彼女は人形に針を刺した。
b. 彼女は人形を針で刺した。

このように英語の自動詞の場所格交替では全体効果があることがはっきりしているが、英語の他動詞ではそれほど明確ではない。日本語の自動詞の場所格交替では動詞の意味に「場所全体に影響がある」という要

素があり、全体効果はない。他動詞では全体効果があるものとないものがある。つまりどちらの言語においても、自動詞の場所格交替と他動詞の場所格交替には違いがある。

2.2. 場所格交替が見られる自動詞の意味

Levin (1993: 53) は英語の自動詞で場所格交替を見せる動詞を意味の上から次のように分類している。

- (9) 光の発生を表す動詞: beam, glow, sparkle など
音の発生を表す動詞: buzz, hiss, shriek など
物質の噴出を表す動詞: drip, foam, ooze など
音の存在を表す動詞:
echo, resound, reverberate など
個体特有の存在の仕方を表す動詞:
bloom, blossom, sprout など
動きに関わる存在の仕方を表す動詞:
dance, quiver, tremble など
swarm 動詞: abound, bustle, crawl, creep, hop,
run, swarm, swim, teem, throng

英語の自動詞で場所格交替を見せる自動詞は意味の上でこれほど多様で、また数も多い。しかし、2.1 で述べたように、日本語で場所格交替する自動詞は数が少なく、意味の面からは「場所全体に存在物が分布する」あるいは「場所が存在物の存在によって機能しなくなる」というものに限られる。

(9) では swarm 動詞のグループだけが意味的な性格付けがされていないがこのグループでは abound,

¹ 「散らかる」(ia) (ib) を比べると (ib) に (ia) がない全体効果があると思われるかもしれないが、(ii) は許容しにくいことから、(ia) も「空き缶が部屋全体に散らかっている」ということではなくとも「空き缶が散らかっていることで部屋の評価が下がった」という意味で部屋全体が影響を受けていると考えられる。

- (i) a. 空き缶が部屋に散らかっていた。
b. 部屋が空き缶で散らかっていた。

(ii) ?? 空き缶が部屋に散らかっていたが、部屋はきれいだった。

² 森川 (2018) にはこれら以外に「うまる」「にじむ」「いっぱいになる／いっぱいである」「ひかる」「かがやく」が挙げられているが、「うまる」は (ia) が不適格なので場所格交替ではない。

- (i) a. *客席に熱心なファンがうまった。
b. 客席が熱心なファンでうまった。

「にじむ」については (iib) は「輪郭がはっきりしなくなる」という意味なので (iia) の「にじむ」と同じ意味ではないので場所格交替ではない。

- (ii) a. 目に涙がにじんだ。
b. 目が涙でにじんだ。

「ひかる」「かがやく」は湖面のように光を反射する場所については (iiib) が可能だがそうでない場所については (ivb) のように交替しないのでこれらは場所格交替する自動詞ではない。

- (iii) a. 湖面に月が光った／輝いた。
b. 湖面が月で光った／輝いた。

- (iv) a. 空に星が光った／輝いた。
b. *空が星で光った／輝いた。

「いっぱいである」は動詞ではないこと、「いっぱいになる」は複合的な形式であることから本稿の考察の対象から除いた。

teem が他の動詞と明確に異なる。abound は形容詞 abundant (「豊富である」) が存在することからわかるように「豊富に存在する」ことを表し、teem も「豊富に存在する」ことを意味する³。存在の表現は典型的には場所を必須とするのでこのような意味の動詞であれば場所を主語とすることは不思議ではない。が、それ以外の動詞は意味からいって場所を主語とすることは想定されない。abound 以外の swarm 動詞は生物が細かく動く様子を表すものであるために場所を主語とする文が印象的であり、それが場所格交替の例文としてよく swarm が用いられる理由であろう。swarm 動詞以外の動詞グループも光・音・物質・植物などの発生あるいは存在を表しており、意味から場所を主語とすることは予想されない。それに対し、日本語の動詞は上述のように「場所全体に物・人が分布する」あるいは「通路や容器である場所に物・人が多数・多量存在して通路や容器として機能しなくなる」という意味であり、場所が主語となることは自然である。

つまり、日本語自動詞の場所格交替は動詞の意味から交替が起こることは予想できる範囲である。しかし、英語の自動詞は abound, teem 以外、主語が場所となることは意味の面からは想定し得ない。

2.3. 自他動詞の対応

英語の動詞では自他同形のもが多く、日本語では自他同形のもが少なくという違いはあるが、自他動詞の対応が日本語でも英語でも見られる。英語では場所格交替を見せる自動詞に対応する他動詞は場所格交替を見せず、場所格交替を見せる他動詞に対応する自動詞は場所格交替を見せないことが以前から指摘され

ている (Salkoff 1983, Dowty 2000)。

- (10) a. The sound echoed in the hall⁴.
「音は廊下に響いた。」
b. The hall echoed with the sound.
「廊下全体にその音が響いた。」
- (11) a. The walls echoed the sound down the hall.
「壁が音を跳ね返して廊下に響かせた。」
b. * The walls echoed the hall with sounds.
- (12) a. Max spread a cloth over the table.
「マックスはテーブルの上に布を広げた。」
b. Max spread the table with a cloth.
「マックスはテーブルに布を広げ覆った。」
- (13) a. A cloth spread over the table.
「布がテーブルを覆っていた。」
b. * The table spread with a cloth.

伊東 (2015) では日本語で場所格交替を見せる他動詞として「散らかす」「満たす」「詰める」「埋める」が挙げられ、対応する自動詞「散らかる」「満ちる」「詰まる」「埋まる」も場所格交替を見せるとされる。しかし、「埋まる」「埋める」は (14)(15) で見るようにいずれも場所格交替をしないのでこのリストから外すことになる⁵。

- (14) a. *客席に熱心なファンが埋まっている。
b. 客席が熱心なファンで埋まっている。
- (15) a. *主催者が客席にサクラを埋めた。
b. 主催者が客席をサクラで埋めた。

「詰まる」「詰める」については、場所が容器⁶である

³ Dowty (2000) は abound, teem を英語自動詞で場所格交替を見せる動詞の中で動きの意味をもたない点で特殊なものとしているが、teem は次の辞書の記述にもあるように多数の存在物が動いているという意味がある。加えて、abound は主語として生物でないものを許容するのに対し teem は許容しない。この点で teem は他の swarm 動詞との共通点がある。

(i) If you say that a place is teeming with people or animals, you mean that it is crowded and the people and animals are moving around a lot.
(<https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english/teem>)

(ii) a. Misconceptions abound in this article. (「この記事には誤認が多い。」)
b. * Misconceptions teem in this article.

⁴ (9) で挙げられた自動詞の中で対応する他動詞をもつものはごく少ない。

⁵ 「土中などの見えないうちに位置するようになる／する」という意味の「埋まる」「埋める」も場所格交替をしない。

(i) a. 車が雪に埋まった。
b. *雪が車で埋まった。

(ii) a. 盗賊は宝物を山に埋めた。
b. *盗賊は山を宝物で埋めた。

また、「埋める」は (iii) のように存在物を主語、場所を目的語とするが、場所格交替とは存在物と場所が主語／目的語として現れる文と斜格で現れる文との交替を指すので、(i) は場所格交替として扱われる文ではない。(iii) のように存在物が主語、場所が目的語となる文については 5 節を参照。

(iii) 熱心なファンが客席を埋めた。

⁶ 認知文法では「容器 (container)」という表現が場所や人間のメタファーとして使われるが、ここでは「収納のための器」という意味で使っている。

場合、通路である場合、容器でも通路でもない場合を分けて考える必要がある。(16) - (17) は場所が容器である場合、(18) - (19) は場所が通路である場合、(20) - (21) は容器でも通路でもない場合である。筆者の判断では場所が容器、あるいは通路である場合には「詰まる」は場所格交替を見せるが、容器でも通路でもない場合には見せない。容器でも通路でもない場合には「詰める」が場所格交替するが、いずれも「対応する自他動詞のどちらかが場所格交替する」ケースではない。

- (16) a. スーツケースに衣類が詰まっている。
b. スーツケースが衣類で詰まっている。
(17) a. 後輩がスーツケースに衣類を詰めた。
b. *後輩がスーツケースを衣類で詰めた。
(18) a. 樋に落ち葉が詰まっている。
b. 樋が落ち葉で詰まっている。
(19) a. #子どもが樋に落ち葉を詰めた。⁷
cf. 子供が樋に落ち葉を詰まらせた。
b. *子どもが樋を落ち葉で詰めた。
cf. 子供が樋を落ち葉で詰まらせた。
(20) a. 枕にそばがらが詰まっている。
b. *枕はそばがらで詰まっている。
(21) a. 業者が枕にそばがらを詰めた。
b. 業者が枕をそばがらで詰めた。

「満ちる」が具体物である存在物に用いられることは多くなく、(22a,b) は平易な文脈とはなじまないだろうが許容できる。「満たす」も場所格交替を見せるので、「満ちる」「満たす」のペアはどちらも場所格交替動詞である。

- (22) a. グラスにワインが満ちた。
b. グラスがワインで満ちた。
(23) a. ソムリエがグラスにワインを満たした。
b. ソムリエがグラスをワインで満たした。

「散らかる」「散らかす」はどちらも平易な文脈で場所格交替を見せる。

- (24) a. 部屋におもちゃが散らかっている。
b. 部屋がおもちゃで散らかっている。
(25) a. 子どもが部屋におもちゃを散らかした。
b. 子どもが部屋をおもちゃで散らかした。

日本語では、少なくとも「満ちる／満たす」「散ら

かる／散らかす」については対応自他動詞が場所格交替をするのに対し、英語では対応自他動詞が場所格交替の可否について一致しない。

3. 考察

第2節での観察をまとめる。

- (I) 英語の自動詞場所格交替では、もともと場所全体が影響を受けるという意味をもつ *abound*, *teem* を除いて、場所主語文に全体効果がみられる。日本語の自動詞ではそもそも場所全体が影響を受けるという意味をもつ自動詞のみが交替する。英語の他動詞交替、日本語の他動詞交替では全体効果はすべての場合にあるわけではない。
(II) 英語で場所格交替を見せる自動詞は (*abound*, *teem* を除いて) 場所を主語とすることが意味の面から予想されない。
(III) 英語自動詞で場所格交替を見せるものに対応する他動詞は場所格交替を見せず、英語他動詞で場所格交替を見せるものに対応する自動詞は場所格交替を見せない。日本語では対応自他動詞がどちらも場所格交替するペアが見られる。

これらの観察をもとに考察を進めていこう。場所格交替については大きく二つの分析が提案されている。一つは Pinker (1989) などの語彙的派生とする分析、もうひとつは Goldberg (1995) などの構文とする分析である。前者では例えばペンキを目的語とする *spray* から壁を目的語とする *spray* が派生される。Dowty (2000) は語彙的派生とする根拠として次の二つを挙げる。

- (i) 交替現象は比較的生産的ではあるが、交替を見せる動詞と見せない動詞があることが意味の面から説明できない。例えば *The horizon blazed with bonfires.* (「水平線にいくつもの焚火が燃え上がっていた」) は許容されるが # *The woods burned with campfires.* (「林中に焚火が燃えていた」) は許容されない。つまり語彙的ギャップがある。
(ii) 全体効果は受動化、主題化などの統語的主語化のプロセスで見られる効果と異なるものである。

しかし、(i) の指摘に反論する根拠が Dowty (2000) の中に見られる。Dowty (2000) は場所が主語となる場合には文は「描写的」で「生き生きとして」いて「知覚志向」であると述べる。そのため (26) (Dowty 2000 の例文 12) では動詞が 'bland' (面白味がない) であり意味の上で無標な移動動詞であるから非文とな

⁷ (19a) は子供が樋に落ち葉を突っ込んだという意味 (この場合樋は通路ではない) では用いることができるが、子供が何かをしてその結果樋が落ち葉のために通路として使用できなくなったという意味では用いることができない。

るとする。(日本語訳はこのような場所主語自動詞文が可能であればもっていたであろう意味を表す。)

- (26) a. * The garden moved with snails.
 「庭中かたつむりが動いていた。」
 b. * The sky flew with birds/autumn leaves.
 「空いっぱい鳥 / 枯れ葉が飛んでいた。」
 c. * The forest walked with deer and other wild animals.
 「森中を鹿やその他の野生動物が歩き回っていた。」
 d. * The river swam with fish⁸.
 「川いっぱい魚が泳いでいた。」

しかし、語彙的ギャップの例として挙げられた burn も、移動動詞ではないが blaze より無標な燃え方の表現であり、場所を主語としないことは (26) の文と同じように説明できてしまうのである。

(ii) に関して言えば、全体効果は場所主語文にだけある特殊なものではない。述語は主語が複数である場合にはその要素全部について述べる。(27) の文であれば the students のすべてが合格したのであり、一部だけということはない。同じように場所が主語であれば述語がその全体について述べるのは当然である。

- (27) The students passed the test.

「描写的」で「生き生きとして」「知覚志向」である点は、場所前置構文 (locative inversion) の少なくとも一部で見られる。場所が前置され、主語が後置された (28a) は (28b) より生き生きと場面を描写する。

- (28) a. Round the bend came the train.
 「カーブの向こうから電車がやってきた。」
 b. The train came round the bend.

また、語彙的派生とするならば、そのような派生が起こりうるような意味の上での関係が基本形と派生形の間になければおかしいが、(II) にあるように英語の場所交替自動詞は意味的にそのような関係にない。

語彙的派生ではありえないなら、どのような分析が

ありえるだろうか。上述のとおり場所が主語になれば全体効果は生まれるので、動詞の性質を記述すればよいだろうか。しかし、(29) が非文であることからわかるように存在物が with 句で示される必要がある。つまり動詞の性質を記述し、そのような性質をもつ動詞は主語になることができると述べるだけでは不十分である。

- (29) a. * The garden swarmed.
 b. * The halls resounded.

また、with 句が手段を表す with と見なせるかという点、それもできない。手段を表す with 句と異なり、移動をしないからである。

- (30) a. Jane carved the meat with her knife.
 「ジェインは彼女のナイフで肉を切り分けた。」
 b. With her knife, Jane carved the meat.
 (31) * With bees, the garden swarmed.

つまり場所主語文では自動詞の直後に with 句が現れなければならない。このように要素の一定の配列が要求されるものは構文と呼ぶべきだろう。そこで、(32) を提案する。「人間にとって感覚的に認知しやすい」こと、「その場所の性格付けになる」ことは Dowty (2000) にすでに指摘されている。

(32) 英語には次の構文がある。

場所主語 自動詞 with 存在物
 ただし、自動詞は存在物を主語とすることができ、多数・多量の存在物とその自動詞の表す行為をする・状態にあることは人間にとって感覚的に認知しやすく、そのことが場所主語の性格づけとなる。

ここで構文としたが、これは Goldberg の構文文法を支持する形でそう述べたのではない。Goldberg (1995) の構文文法では構成要素 (あるいはすでに確立された構文) の意味から予想できない意味がある場合には構文と定義しており⁹、(32) の制約は構文文法の枠組と整合する。しかし、構文文法の構文においては動詞の参与者役割 (participant roles) と構文の項

⁸ ただし次のような実例もある。

(i) Its big lagoons swam with fish, and little pigs and fowl ran freely everywhere.

Tabatha Taylor (2020) (試訳「数ある広大なラグーンには魚がいっぱいで、小型の豚や鳥がそこかしこを自由に走り回っていた。」) *Cataqueria Island* Paragon Publishing, p.7

⁹ C is a CONSTRUCTION iff_{def} C is a form-meaning pair <F_i, S_i> such that some aspect of F_i or some aspect of S_i is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions. (p.4)

役割 (argument roles) が適合して (compatible) 融合する (fuse) ことが必要となる。冒頭に述べたように存在文を除けば場所は修飾的な要素であり、(9)の自動詞の参与者役割に場所が含まれるとは考えにくい。また、構文文法のように広範囲の現象を構文と考えたいわけでもない。意味の上で場所を主語としない動詞が場所を主語とする、通常の意味の派生では説明できない文が存在することを説明するために構文という概念を用いるのである。

なお、場所格交替は語彙の派生ではないが、(32)により英語の自動詞が場所主語文で用いられることから動詞に「多数・多量存在して場所全体に分布する」という新たな意味が派生することは見られる。(33b)は(32)により生じる場所格交替文だが、(34a,b)のcrawlには「這う」という意味がなく、「多数(動いて)いる」という意味となる。同じように(35)のswarmにも惑星が「群れている」という意味はなく、「多数存在する」という意味である¹⁰。

- (33) a. Snails are crawling in the garden.
「カタツムリが庭を這いまわっている。」
b. The garden is crawling with snails.
「庭中カタツムリが這いまわっている。」
- (34) a. Reporters were crawling on the campus yesterday.¹¹
「昨日キャンパスはレポーターだらけだった。」
b. I was sure the campus was crawling with reporters after the disappearances.¹²
「失踪を受け、きっとキャンパスはレポーターだらけだろうと思った。」
- (35) The Milky Way May Be Swarming With Planets That Have Continents and Oceans Like Earth¹³
「銀河には地球のように陸と海をもつ惑星が多数ある可能性がある。」

4. 存在物を主語、場所を目的語とする他動詞

(32)の構文が英語にあり、日本語にないとしても(Ⅲ)は説明されていないので、日本語と英語どちら

の言語にも見られる存在物が主語で、場所が斜格でなく目的語となるような他動詞の考察に入る¹⁴。このような他動詞は場所格交替する他動詞とは異なる。日本語には少なく、筆者が見出し得たのは「埋める」のみである。

(36) 熱心なファンが客席を埋めた。

しかし英語には多くみられる。Pinker (1989)は場所あるいは存在物を目的語とする他動詞を content-oriented (存在物が目的語で場所が into/onto 句として現れるのが基本)と container-oriented¹⁵(場所が目的語で存在物が with 句として現れるのが基本)に分け、それぞれの中で場所格交替をするものとしないうちに分類している。これらの一部が存在物主語・場所目的語をもつ文で現れる。ただし、content-orientedで場所格交替をしない他動詞にはこのようなものがない。(37-40)にそれぞれの可能な文型を例示する。

- (37) content-oriented で場所格交替をする他動詞グループ
(c)の文型で現れる動詞 smear/smudge/splatter/spray/streak
a. She smudged dirt on her face.
「彼女は泥を自分の顔になすりつけた。」
b. She smudged her face with dirt.
「彼女は自分の顔を泥で汚した。」
c. Dirt smudged her face.
「泥で彼女の顔は汚れていた。」
- (38) content-oriented で場所格交替しない他動詞グループ
(c)の文型で現れる動詞 なし
a. She dribbled paint on the floor.
「彼女はペンキを床に垂らした。」
b. * She dribbled the floor with paint.
c. * Paint dribbled the floor.
- (39) container-oriented で場所格 交替する他動詞グループ
(c)の文型で現れる動詞 cram/crowd/jam
a. They crammed the garage with tools.

¹⁰ とは言え、(34a, b)のcrawlには存在物は不要で邪魔なものというニュアンスがある。これは這いまわる動物に対する人間の一般的な認識であろう。(35)でも地球から見ると宇宙の中で銀河は星が群れていると言えよう。

¹¹ E.L. Jose (2018) *Snakes and Ladders*, Norton Press より。

¹² Julia Crane (2020) "Shades of Magick" in *Witch Ways*, Dark Valentine Press より。

¹³ <https://scitechdaily.com/the-milky-way-may-be-swarming-with-planets-that-have-continents-and-oceans-like-earth/> 閲覧日 2021/9/14

¹⁴ 伊東 (2015)、森川 (2018) が「埋める」を場所格交替動詞と誤認定しているのも、存在物を主語、場所を目的語とする他動詞が考察されてこなかったためであろう。

¹⁵ この container とは比喩的な概念で、場所を示す。

「彼らはガレージに道具類を押し込んだ。」

b. They crammed tools into the garage.

「彼らは道具類をガレージに押し込んだ。」

c. Tools crammed the garage.

「ガレージは道具類でいっぱいだった。」

(40) container-oriented で場所格交替しない他動詞グループ

(c) の文型で現れる動詞 deluge/douse/flood/inundate/blanket/coat/cover/encrust/face/inlay/pad/shroud/smother/line/edge/fill/occupy/adorn/burden/clutter¹⁶/deck/dirty/embellish/enrich/garnish/imbue/infect/litter/ornament/pollute/replenish/season/soil/stain/taint/trim/drench/soak/impregnate/suffuse/block/clog/dam/plug/bind/chain/stud/bombard/blot/riddle/splotch/stud

a. They littered the streets with bottles and cans.

「彼らはびんや缶を通りに散らかした。」

b. * They littered bottles and cans on the streets.

c. Bottles and cans littered the streets.

「びんや缶で通りは散らかっていた。」

Content-oriented であっても container-oriented であっても場所格交替する動詞グループには存在物主語・場所目的語をとる動詞がある¹⁷。そして content-oriented で場所格交替しない他動詞には場所に影響を与えるという意味がないため存在物主語・場所目的語をとる動詞がなく、container-oriented で場所格交替しない他動詞はもともと場所が影響を受けるという意味をもっているので多くが存在物主語・場所目的語構文をとると考えられる。

日本語「埋める」には対応する自動詞「埋まる」があり、(41) で例示するように場所が主語、存在物が斜格となる。しかし、英語では (37) (39) (40) の (c) の他動詞に対応する自動詞がない。「(存在物が場所を)

汚す」「(存在物が場所を) いっぱいにする」「(存在物が場所を) 散らかす」という意味の他動詞はあるが「(存在物で場所が) 汚れる」「(存在物で場所が) いっぱいになる」「(存在物で場所が) 散らかる」という意味の自動詞がないということになる。

(41) 客席が熱心なファンで埋まった。

(42) a. * Her face smudged with dirt.

b. * The garage crammed with tools.

c. * The streets littered with bottles and cans.

これらの他動詞が表現する事態においては場所と存在物が重要なことから、意味の面から考えると場所が主語になるような対応自動詞があっても不思議ではなく、事実日本語にはあるのに英語にはない。この事実はどうのように説明できるだろうか。

他動詞の目的語を考えてみると、もちろん全体が動詞の影響を受ける。例えば (43) の文では、Jane は学生全員に会ったことになる。

(43) Jane met the students.

とすると、(37c) (39c) (40c) のように場所が目的語となる場合には場所全体が影響を受けており、そのような場合に、場所が主語となるような対応自動詞がないということになる。これは、場所が主語になるためにはある程度コストがかかり、(9) の動詞のように場所が斜格で現れる場合、全体効果を得るためにそのコストをかけ (32) の構文を用いて主語となるが、目的語の位置に現れることができる場合にはすでに全体効果を表す方法があり、その余分なコストをかける必要がないためと考えられる。これは (44) のようにまとめられる。

(44) 英語で場所が主語になるのは次の二つの場合に限られる。

a. 動詞に場所全体が影響を受けるという意味が

¹⁶ Iwata (2008: 69) では litter, clutter が存在物を目的語とすることができるとして、次の例を挙げる。

(i) He left biscuits, cake, pies, fruit and bowls of custard littered around the shelves, but it remained untouched. (BNC)

(ii) He jumped down from the bed, hitting his knee against the unseen objects cluttered around the bed.

しかし、このような例では littered, cluttered が形容詞として機能している可能性もあり、これらを根拠として litter, clutter が存在物目的語をとるとは言えない。実際に cluttered の場合次のように比較の表現を伴う例が見られる。

(iii) Over the summer, things tend to get a bit more cluttered around the house.

「夏の間、家の中はもっとごちゃごちゃする傾向がある。」

<https://www.junk-king.com/locations/phoenix/blog/2021/9/15> 閲覧

¹⁷ content-oriented の動詞、container-oriented の動詞の例外をひとつずつ挙げる。smear などと同じようにある表面に対して強い接触と動きがあることを示す rub, cram などと同じように容器の限界を越えるくらい容器に入れるという意味をもつ stuff は存在物主語、場所目的語の他動詞とならない。

(i) * Cream rubbed his back. (「クリームが彼の背中に塗り込まれた。」)

(ii) * One-dollar bills stuffed her wallet. (「彼女の財布は1ドル札でいっぱいだった。」)

ある場合 (場所格交替する *abound/teem*、場所格交替しない *overflow* など)

b. (32) の構文にあてはまる場合

そのため、存在物主語・場所目的語文で用いられる他動詞に対応する場所を主語とする自動詞は存在しない。

5. 結び

本稿では場所に関する三つの観察を提示した。(I)、(II) の日英の違いを説明するために英語には (32) の構文があること、日本語には動詞の意味と関わりなく場所を主語とする方法はないことを主張した。森川 (2018) は日英で移動の表現が異なることに注目し、移動に関する Talmy (2000) の枠組みを用いて日英の場所格交替の説明を試みている。Talmy (2000) は移動を表現するにあたって、動詞語根が典型的に¹⁸ Motion と Path を表す言語 (スペイン語、日本語、韓国語など)、動詞語根が典型的に Motion と Co-event (原因、様態が含まれる) を表す言語 (英語、中国語など)、動詞語根が典型的に Motion と Figure (移動する主体) を表す言語 (ナバホ語など) があるとする。英語の文 (45a) では float 「浮く、漂う」という移動の様態を表す動詞が移動 (MOVE¹⁹) に加えて移動の様態 (Manner) を表すが、スペイン語で同じ事態を表す文 (45b) の動詞 *entrar* は移動 (MOVE) に加えて Path を表現する。この Path には「何かの中へ」「何かの外へ」「何かを過ぎて」「何かを通して」「何かの中を上へ」「何かの中を下へ」「何かから遠ざかって」「何かに戻って」「何かの回りを」「何かを横切って」「何かに沿って」などが含まれる (pp.49-50)。スペイン語で「漂いながら」という移動の様態を表現する場合は動詞 *flotar* の現在分詞を用いる。日本語も (45c) は非文であり、(45d) のように表現する必要がある。

- (45) a. The bottle floated into the cave.
「びんは漂いながら洞穴の中へ入っていった。」
- b. La botella entró a la cuevo (flotando).
定冠詞 びん 入った へ 定冠詞 洞穴 漂いながら
- c. *びんは洞穴の中へ漂った。
- d. びんは洞穴の中へ (漂って) 入った。

動詞の意味から見ると、英語では (語彙項目として現れない) MOVE という意味に Co-event を表す動詞

float が融合 (conflate) して表現されているのに対し、スペイン語、日本語では *flotar* / 「漂う」は MOVE と融合しないため、*entrar* / 「入る」という MOVE と Path を表す動詞を用いる。「動詞の語彙の意味で表現されなければならない」とは、この枠組では「Co-event の動詞が Motion Event の MOVE と融合できない」ということになるため、森川 (2018) は場所格交替に関する日英の違いは英語では *swarm* など MOVE と結びつきやすい動詞が状態 BE_{LOC} と融合するが、日本語ではしないためと説明する。しかしある言語で動詞が MOVE+Manner を表すことはその言語で MOVE と結びつきやすい動詞が BE_{LOC} と融合することを直ちには導かない。さらに *swarm* 動詞などがなぜ MOVE と結びつきやすいのかという説明がない。本稿での提案のように英語には場所格交替に関する構文があり、日本語にはないという一般化がやはり必要である。

また本稿では存在物主語・場所目的語をもつ他動詞を両言語で検討し、英語では container-oriented で場所格交替しない動詞に多いことを、これらの動詞がもとから場所が影響を受けるという意味をもつためと主張した。そしてこのような動詞が対応自動詞をもたないのは、すでに目的語の位置で全体効果を表すことができているため、さらにコストをかけて場所を主語とする必要がないためとし、(III) の説明とした。

参考文献

- Dowty, David (2000) " 'The garden swarms with bees' and the fallacy of 'argument alternation.' " In Ravin, Y. et al. (2000) *Polysemy: Theoretical and computational approaches*.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation : A lexical-constructional approach*. John Benjamins.
- Kawano, Yasuko (2019) 'A Critical Review of English Locative Alternation Studies.' 『埼玉大学紀要 (教養学部)』 54-2:17-37
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Survey*. University of Chicago Press.
- (2006) 'English Object Alternations : A unified account.' <http://web.stanford.edu/~bclevin/alt06.pdf>

¹⁸ ここで用いた「典型的」は Talmy の characteristic の訳語だが、characteristic とは (1) 口語的 (colloquial) であり、(2) 話し言葉の中で頻度が高く (frequent)、(3) 広汎 (pervasive) であることと規定されている (p.27)。

¹⁹ Talmy の MOVE は着点 (結果) を持つ場合と持たない場合の両方を含む。

- Pinker, Stephen (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. MIT Press.
- Salkoff, Morris (1983) 'Bees are swarming in the garden: A Systematic Synchronic Study of Productivity.' *Language*, 59:2 288-346.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics. Volume II Typology and Process in Concept Structuring*. MIT Press.
- 伊東朱美(2015)「日本語の移動変化動詞と場所格交替」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41:95-105.
- 杉浦滋子 (2019)「日本語の『場所格交替』の全体効果はどのように生じるか」日本言語学会第159回大会口頭発表
- 杉浦滋子 (2020)「日本語の場所格交替における全体効果と動詞の語彙的意味」『言語と文明』麗澤大学大学院言語教育研究科 18(1):3-17
- 杉村泰 (2009)「コーパスを利用した複合動詞『-返る』の意味分析」『言語文化研究叢書』8:77-91 (名古屋大学大学院国際言語文化研究科)
- 森川文弘 (2018)「自動詞場所格交替に生じる動詞の日英比較」『姫路獨協大学外国語学部紀要』31:53-66